

---

# ねこねこねこ

白井文子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ねこねこねこ

### 【Nコード】

N1648W

### 【作者名】

白井文子

### 【あらすじ】

猫嫌いの少女と猫になりたい少女の物語。

ねこねここねこ。

私が呟くと、ミサキが同じくらい微かな声でにやあと言う。同時に頭で白い猫の耳が揺れる。折り紙とヘアピンでこしらえた猫耳の飾りを付けた彼女が、頭を揺らせて動かしているのだ。どうやれば本当の猫の耳みたいに動くか研究したの、と得意気に胸を張るミサキの言葉が思い起こされる。が、猫嫌いの私にはその工夫は上手く伝わらない上に、耳を気にするあまり彼女の表情は滑稽でもある。苦笑が浮かぶ。

ねこねここねこ。もう一度、今度はさっきよりはつきりと、反芻するように口に出す。昔どこかで聞いたフレーズである。童謡か絵本か、と頭を捻る私を、ミサキは首をかしげて見つめていた。たぶん、彼女が出来る限りの猫らしい仕草で。結局そちらに気を取られて、思い出すことは出来なかった。

次の日には尻尾が生えていた。段ボールを切り抜いただけの茶色い、固そうな尻尾だ。耳は白いのにいいんだろうか、と思うが、口には出さない。私のとなり座り、黙って小さな尻をゆるりゆるりと振る彼女を横目で見て、読んでいた本に筆を挟む。

「猫らしく尻尾を振る練習？」

「なんで解ったの。」

「猫らしい」警戒をあくまで丸い瞳孔の奥に光らせて、ミサキは私を睨み付ける。私は肩をすくめた。

「あんまり似てないね。」

吐き捨ててもう一度本を開いた。友達に薦められて読み始めた新書である。なんでもないことを漢字ばかり使ってやたらと小難しく説明していて、字を追うだけで頭が痛くなってくる。どこまで読んだかとページをざっと目でなぞったところで、ミサキが思いきり左腕を引っ掻いた。思わず悲鳴をあげる。

「なんてことするの！」

「猫は引つ掻くものだからいいの。」

当然のように言い放ち、そつばを向いて頬を膨らませる。生意気なその頭を軽く小突くと、また猫の鳴き真似をする。

「そんなに猫が好き？」

呆れ混じりにそう尋ねると、彼女は勢い良く首を捻ってこちらを向き、怒ったような顔で答える。

「べつつにー。」

そして、赤い薄い舌をべえと出して見せた。

ミサキが父親に連れられてうちに来たのが一週間前の話である。私の義理の叔父に当たるその人はなんだか妙に腰が低くて、私の気に入らなかった。ミサキはミサキで、目が合つてもにこりともしなかった。恐る恐る、お姉ちゃんのこと覚えてる、と聞くと、何も言わずに首を横に振った。彼女の母親が妊娠したらしい。また一人従兄弟が増えるのだ。それで入院している間、ミサキを預かつて欲しいのだと叔父は言つて、母はその頼みを二つ返事で受け入れた。母から姉に変わった頼もしい彼女の顔と、無愛想なミサキの顔を見比べて、先が思いやられるな、と内心で呟いた。

「親指姫はあんたのこと嫌いだって。」

ミサキが一番はじめに私に発した言葉が、それだった。まるで意味が解らずに、ぽかんと口を開けたまま凍りついた私に、ミサキはあからさまな嘲笑を加えて投げて寄越した。

「残念だったね。」

「なに言ってるの、意味解らない。」

「頭悪いの。」

そこで我慢がなくなつて、ミサキの太ももを蹴り上げた。彼女は甲高い声を上げてから、敵意を剥き出しにした表情で私を睨み付けた。

「夢を見れない人間に、生きてる意味なんてないんだから。親指姫がそう言うんだから間違いないよ。」

涙目で捲し立てる彼女の語調には、絶対的な自信が見え隠れしていた。

「誰が、つて？」

「あんななかに教えない。」

叫んでミサキは走り去った。間もなく母のいる台所から、お姉ちゃんが蹴ったの、と訴える泣き声が聞こえた。適当に宥めてくれたのだろう、母親からお咎めはなかった。

しかしそれから、暴力を振るわれたのにも関わらず、ミサキはいつも私の隣にいた。何やらぶつぶつ呟いていたかと思えば、折り紙を切り抜いて例の猫耳を作っては、手鏡を取り出して眺める。そしてまた僅かに形を調整する。生意気な素振を見せはするが、やはりまだ幼い子供なのだろう、苦笑混じりにそう思い始めた頃に、ミサキがとうとう完成した猫耳を自慢してきたのである。彼女なりの試行錯誤を不本意ながら見守り続けていた私にしてみればそれは今さらのお披露目であったのだが、ミサキは作業の間、私のことなどいないものと見ていたらしい。

「リアルでしょ。」

誇らしげに微笑むミサキの頭には、到底リアルとは言えない、三角に切った折り紙が揺れている。図鑑を睨んで作っているところを見ていなければ、それが猫の耳だとは解らなかったかもしれない。

「なんで私に見せるの。」

予期しない問いだったのだろう、ミサキは微かに首をかしげて、何度か瞬きをした。答えが返ってくる様子はなかった。それよりも気になったことがあった。

「その動き、ちょっと猫に似てるね。」

あくまでちょっと、だったのだけれど、突然綻んだミサキの満足そうな顔に、とてもそうは言えなかった。それからミサキは、ことあ

る毎に上目遣いに首をかしげるようになった。

ねこねここねこ。

ミサキを見てみると、ねこねここねこ、が頭から離れない。出所が解らないのが、寧ろこの言葉を色濃く印象づけているようだ。私は何度目かも解らないねこねここねこを唱えると、ミサキもまた何度目かも解らない首をかしげる仕草をして見せた。

「それなんなの。」

「解んない。」

「絵本？」

「覚えてないのよ。」

暫く空に目を泳がせて黙っていたミサキは、やがてぽつりと言葉を発した。

「親指姫は、知らないって。」

「親指姫？」

前にも彼女から聞いた覚えのあるその言葉を、引き留めるように繰り返す。

「知ってるでしょ、親指姫。」

当然のように答え、それでもきつとミサキは、私にその意味が解らないことを見越しているのだと思う。答えを待つ風を装いながら、用意した次の言葉はもう喉まで出かかっているのだ。

「絵本の？」

「そう。私は、親指姫なの。」

腑に落ちないまま黙り込んでしまう。単語は理解できるのに。怪訝そうな表情をしていたのが可笑しかったのか、ミサキはくすりと笑って続ける。

「私は魔法使いになるから。親指姫が着いててくれるの。本当は猫がいなくちゃいけないんだけど、私喘息だから、触っちゃいけないの。」

そして、頭につけた猫耳を指で示す。こんなに長く話してくれるの

は初めてだ。若干の動揺を隠せないまま、相槌で話の先を促す。ミサキの表情も、今までで一番輝いていた。

「聞きたい？私がどうして、魔法使いになれるのか。」  
私が迷わず頷くと、ミサキのあどけない物語りが始まった。

このあいだ学校でね、授業中に、水曜日だから三時間目は理科だったの。だけど、理科の教科書って、虫の写真が載ってるでしょ。違うの、普通に虫を見るよりずっと大きくて、こっちを見てるやつ。あれって怖いでしょ？目、大きいし。だから教科書、開くのやだったの。それで、あんまり話聞いてなかった。あ、ママに言わないでね。

それでね、退屈だったから、ノートで遊んでたの。あ、ノートにも、本当は虫の写真貼らなきゃいけないんだけど、私は捨てたから怖くないのね。ノートの、何も書いてないページに、鉛筆できれいに丸を描いて、それを顔にしたり、地球にしたり、お花にしたり、風船にしたりして遊ぶの。結構、色々出来て、楽しいんだけど。

それで、魔方陣を書こうって思ったの。

魔方陣って知ってる？私本で読んだの。悪魔とか、妖精を呼び出すのに、模様を付けた丸みたいなのを使うんだけど、それが魔方陣なのね。授業中に妖精が来てくれたら不思議でしょ。みんなびっくりするでしょ。だから、素敵だと思ったの。しかも、私の妖精で、なんでも言うこと聞いてくれるんだから。ノートにね、あ、使つてないところだから大丈夫なんだけど、魔方陣みたいな、模様の入った丸をたくさん描いた。だけどあんまりよく覚えてなかったから、結構てきとう。

ちょっとずつ変えて、本当はどんなだったかなあ、って思ったら、急にひとつ、私の描いた魔方陣が光ったの。ほんとだよ。ほんとに、ほんと。信じてないでしょ。それで、出てきたのが親指姫。ノートから、すうって出てきた。不思議でしょ。自分で親指姫って言うんだから間違いないよ。みんなに見えちゃうって思って慌てた

けど、誰も見てなくて、ラッキーだと思った。でも、本当は見えてなかったんだって。あとで親指姫が言ってた。

親指姫は、蝶々の羽が生えてて、ピンクのドレスがふわふわで、凄く可愛い。ほんとに、絵本の中から出てきたみたい。それでね、親指姫が、魔法使いになりなさいって言うの。妖精を呼び出せるよ。うな、夢を見られる子は、魔法使いにならなきゃ駄目だって。

私はうんって言った。だから私は魔法使い。親指姫は今もここにいるの。見えないでしょ。私には見えるの。いいでしょ。魔法使いになるにはね、何も練習しなくてもいいんだって。大人になってもまだ親指姫が見えていたら、私は魔法を使えるようになるの。こんなにはつきり見えてるんだから、簡単だよ。

だから、私は本当に魔法使いになるの。

そう締め括ると、ミサキは照れ臭そうにはにかんだ。何も言うことが出来なかった。空想にすぎないのだろうとは思うが、思わず引き込まれてしまう話ぶりだった。あまりにも真剣に話すミサキのまわりに、もしかすると本当に、彼女の言う親指姫が飛び回っているのかもしれない、と思わせるほどに。

「凄いね。」

話の途中までは終わったら何を言おうかと考えていたのに、口から溢れたのは素直な賛辞だった。ミサキもそれは予想していなかったようで、喜ぶよりもむしろ驚いた顔をして、それでも何度も頷いた。「本当は猫を飼わなきゃいけないんだけどね。そうしたら発作で死んじゃうって言ったら、じゃあ自分でどうにかしなさいって、親指姫が。」

「それでその耳？」

「そう。」

改めて皺のついた折り紙を眺める。

「次作るときは手伝ってあげるよ。もう壊れそうだし。」

ミサキは今度こそ目をまん丸にして、それでも控えめな声で、あり



がとう、と言った。

ミサキを預かってしばらく経ったある朝、ミサキは自分が姉になったことを告げられた。元気な男の子、だそうだ。私の母がにこやかにそう話すのを、ミサキはどこか釈然としない顔で聞いていた。

その日、ミサキは母に連れられて、弟の顔を見に出掛けていった。一人で家に残された私は、意味もなく部屋を歩き回ったり、カレンダーを眺めたり、あの手この手で暇を潰そうとした。着いていっても良かったのだけれど、眉をひそめたまま固まっているミサキと、一緒に行く気にはなれなかった。五月生まれか、確か、牡牛座だっけ。水瓶座の姉と、仲良くやれるといいのだけど。

ミサキの親指姫は、ちゃんと彼女に弟の存在を教えてくれるだろうか？

下手くそな猫の耳を付けて頭を振る九つも年上の姉を、彼は受け入れてくれるだろうか？

漠然とした不安は尽きない。

三時間かそこらで早々と帰ってきたときには、ミサキは何やら心底不満そうな顔をしていた。

「お帰り。」

声を掛けると、ミサキは答えずに手を出した。預かっていた耳つきピンをその手に乗せてやると、よろしい、と言った風に頷く。私の隣に座り、ピンを付けながら、ミサキは溜め息をついた。

「みんなが言うほど可愛くない、赤ちゃんって。でぶだし、くしゃくしゃだし。泣いてばかりだし。」

「まあね。」

「早く魔法が使えるようになりたい。そうしたら、弟なんて要らないって言うの。」

思わず吹き出してしまってミサキに睨まれる。慌てて真面目な顔を取り繕い、彼女を宥めようと頭を撫でてやる。手が往復する度に、

耳がカサリ、カサリと音を立てる。

「そこまで言わなくても、ねえ。」

場がしんと静まってしまふ。ミサキはただ私に身を任せていた。耳の鳴る音だけが、単調なリズムを刻む。

「親指姫は、夢を見られない人間に生きている意味なんてないって、いつも言うの。」

弱々しい、泣き出しそうな声だった。昨日までの生意気なほど自信に満ち溢れた彼女からは想像もつかない。

「私は夢を見られてないのかな。だから……。」

言葉は途中で吸い込まれるように消えてしまった。代わりに幼い嗚咽が漏れる。手のひらに収まってしまふ小さな肩が震える。

「どうしたの。大丈夫だから。」

泣き出してしまったミサキを曖昧に慰め、頭を撫でる力を少し強くする。耳が派手に折れ曲がってしまふ。焦っているな、と苦笑する。

「弟なんて嫌い。大嫌い。ママに会いたい。」

ミサキは何度もそう繰り返していた。大丈夫よ、大丈夫だから、と私も馬鹿の一つ覚えのように同じ言葉を重ねながら、ふと思いついて呟く。

「ミサキはその辺の人よりは、ずうっと夢を見てるでしょ。」

悪意のない皮肉も混ざった言葉だったのだけれど、一度、一際大きくしゃくり上げて、ミサキは素直にうん、と返事をした。

間もなくミサキは帰っていった。帰り際に私に駆け寄ってきて、今度猫の耳作ってね、と耳元で囁く。私が快諾すると嬉しそうに笑う。いつになく可愛らしいと思う。

「親指姫と弟君に宜しくね。」

「うん。弟は、魔法使いになるまでだから我慢する。」

さらりと恐ろしいことを宣言し、頭の猫耳を揺らす。私が折ってしまったせいでかなりぼろぼろになってしまっているのだが、彼女は気にも留めていない様子だった。

ミサキの家族が乗った緑の軽自動車が角を曲がる時、窓から手を振るミサキの姿が一瞬だけ見えた。

両親に連れられ、弟の手を引いたミサキが次にうちに遊びに来たとき、弟は五歳になっていた。

長く伸びた髪をポニーテールに纏めたミサキは、ケイタと名付けられた弟をいとおしそうな目で見る。私のこと覚えてる？と聞くと、覚えてるよーなどとけらけらと笑う。疑わしいものだ。警戒する様子もなく良く私になついてくるミサキは、テニス部に入ったんだとか、面白い友達がいるとか、にこにこ笑いながら丁寧に話してくれた。良くいる中学生と言った風だった。

「親指姫は？」

ついそう尋ねる。ミサキはちよつと首をかしげる。あ、と思ったところで、快活な声が思考を遮る。

「あー、小さいとき好きだったなあ、懐かしいなあ。」

すっかり忘れてしまったのだろうか。ミサキはどうやら、魔法使いにはなれなかったようだ。ケイタを自分から膝に抱いているところを見ると、その必要はなかったのかもしれないが。

もし私が猫耳を傷つけてしまわなかったら、ミサキは魔法使いになるために猫になろうとしていた、幼い自分を忘れなかっただろうか？

きつと仕方がないことなのだろう。小さいときのことを克明に覚えていることなど出来ないのだろうか。だがどうしても、自分の指先で折れた折り紙の感触を思い出さずにはいられなかった。

ミサキの親指姫が今のミサキを見たら、生きている意味がない、と一蹴するのだろうか？

「そうそう、私猫飼うことにしたの。やっと小児喘息が治ったから。」

ミサキが嬉しそうに言った。

「ねこねこねこ、って歌あるよね。あれ、歌だっけ、絵本だっけ……。」

私もそのフレーズには聞き覚えがあった。ミサキと一緒に首をかしげる。

「なんだっけね。」

ねこねこねこ、と口の中で唱える。にやあと鳴くミサキの声が、脳裏を過っていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1648w/>

---

ねこねこねこ

2011年10月9日14時52分発行